群教セ	E01-01
	平14.205集

学びをつなぐ確かな連携の在り方

― 教師が変わる・子どもが変わる・保護者が変わる―

長期研修員　櫻井　雅明　　赤坂　文弘
小川　吉晴　　角橋　澄子
関口　正之

1　はじめに

「子どもが生き生きと学ぶ姿を見たい」「子どもに様々な体験活動から豊かな学びをもたらしたい」という教師の願いが本研究の出発点である。そのためには、多様な連携を通して学校を開き、家庭・地域の教育力を生かしていくことが必要であると考える。

今、学校では「開かれた学校」を目指し、家庭・地域との連携の在り方が問われている。各学校では、総合的な学習の時間や学校行事等において連携を生かした様々な取組が行われている。そこで、「連携」について、県内の教職員 283 名を対象にアンケート調査を実施した。

このアンケートの結果から、「家庭地域との連携ができている 81.5 %」「教職員間との連携ができている 86.0%」と、連携を図った教育実践が行われていることが分かった。しかし、その内容は右の結果のように、「総合的な学習の時間」「生徒指導・生徒理解」に占める割合が高いなど、連携を生かした教育活動の場が限られたものになっていると言える。また、「家庭や地域、保護者との連携を積極的に進めていこうとしている 84.1 %」と回答しているものの「何をどうしたらいいのかわからない」といった悩みも抱えている。

【県内 283 名を対象にした「連携」アンケートの一部】

＜アンケート・学校内の連携について＞
よく実践されていると思うもの　（重複回答）

	全体の人数	%
教科	１０７	38.6
道徳・学活	３５	12.6
総合的な学習の時間	１１５	41.5
生徒指導・生徒理解	１８４	66.4
学級経営	３１	11.2
教育課程	３７	13.4
管理職の授業参加	７１	25.6
その他	３	1.1

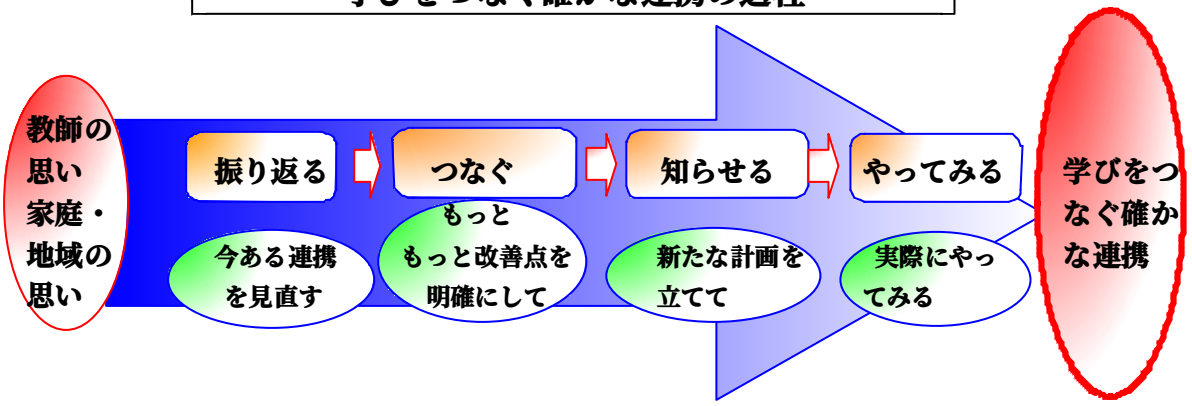
これらのことから、「連携」について、地域の教育力が十分に生かしきれていない、単発的でつながりや広がりがない等の課題が明らかになった。

そこで、本研究では今後、「連携」を図る上で重要なことを次の２点ととらえた。

○　連携の過程を明確にし、学校だけでなく家庭や地域の思いや願いが十分に生かされるようにすること

○　継続性をもって取り組めるようにし、教師や家庭・地域の思いをつなぎ、確かな連携にしていくこと

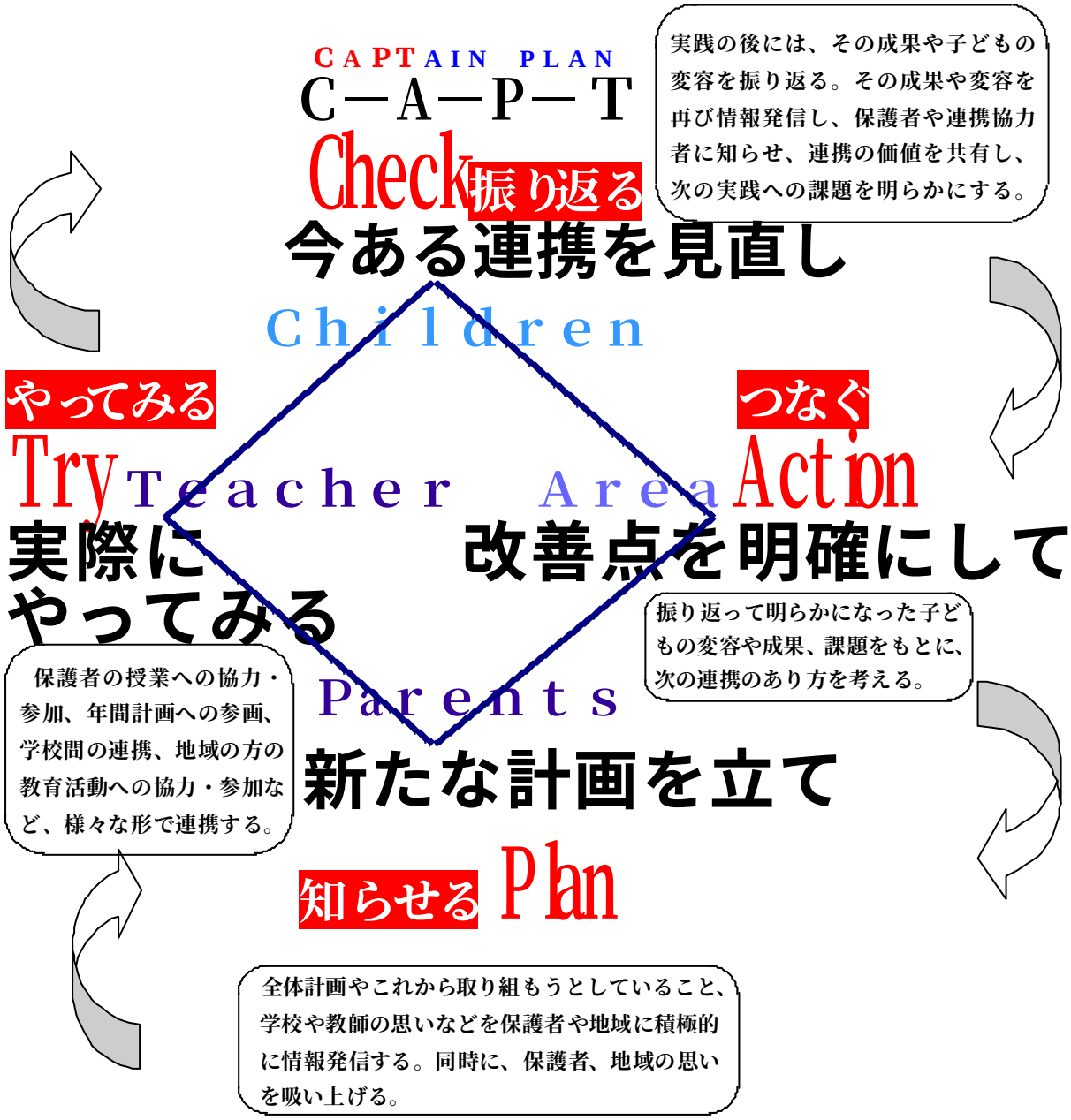
学びをつなぐ確かな連携の過程



このように、学校と家庭・地域が相互の信頼関係をもとにそれぞれの立場から連携を図っていくことにより、開かれた学校に一歩近づくことができるのではないかと考えた。

２　連携の道筋　Ｃ－Ａ－Ｐ－Ｔサイクル

本研究では、連携への道筋として、Ｃｈｅｃｋ→Ａｃｔｉｏｎ→Ｐｌａｎ→Ｔｒｙという４つの過程を考えた。これまでも学校で連携は行われてきている。しかし、連携による教育活動を行っても、連携の後でその実践をそれぞれの立場から振り返り、その反省を次の実践につなげる取組が弱かった。とりわけ子どもの反応や変容を、成果として、協力、連携して頂いた保護者や地域の方々に伝えることが十分為されておらず、学校側からの一方的な振り返りに終わってしまっていた。その反省の上に立ち、これからの連携は、「振り返る」「つなぐ」（Ｃｈｅ－ｃｋ＆Ａｃｔｉｏｎ）の過程にも力を入れていく必要があると考えた。



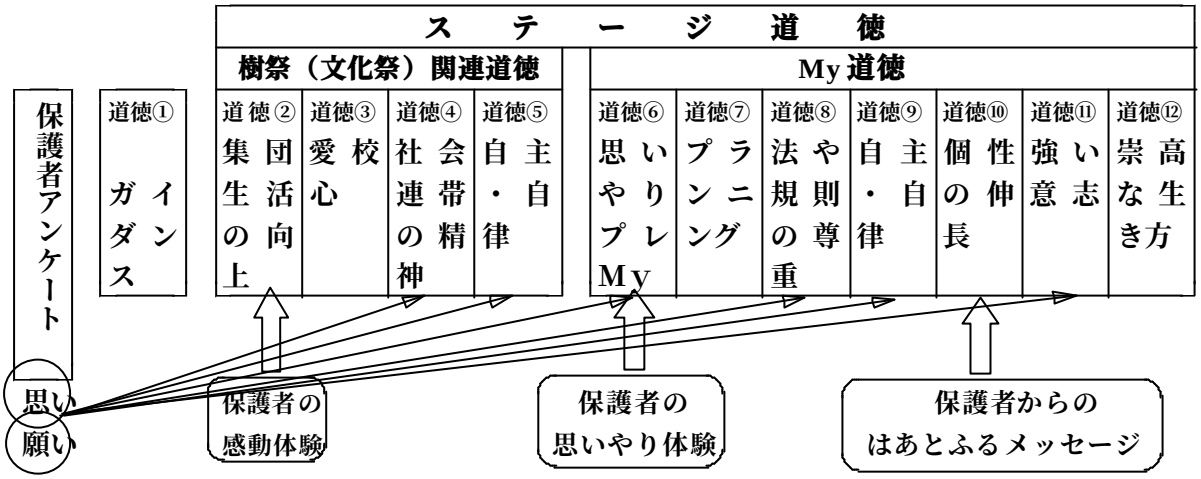
３　ファイブ提案

＜　道徳教育Ⅰ　＞

授業を変える－教師主導から子どもが主役の道徳学習へ

－ 子どもと共に創る“Ｍｙ道徳”の時間を取り入れた「ステージ道徳」の提案－

心の教育を進めるに当たり、保護者との連携は必要不可欠と考え、まず、保護者を道徳教育の舞台に乗せ、道徳教育に興味・関心をもってもらうために、子どもと保護者で一緒に取り組む心のノートを使ったアンケートを実施し、保護者の思い、願いを把握した。また、授業では、子どもに多様な考えに触れさせたり、子どもがもった課題を解決するためのヒントになるよう、保護者の考えや体験を子どもが考えるな過程に取り組んだ。

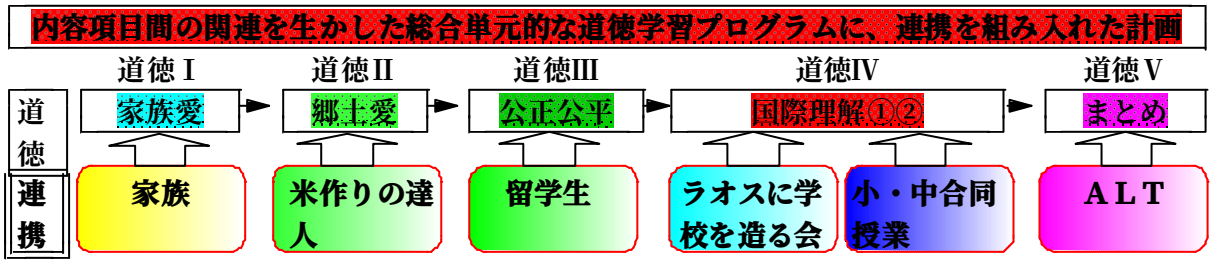


＜　道徳教育Ⅱ　＞

自己の世界を広げようとする心を育てる道徳教育の推進

－ 小中の連携を国際理解に生かした総合単元的な道徳学習プログラム－

自己の世界を広げようとするために、子どもを取り巻く多様な価値観との出会いを生かしたいと考えた。この実践では、国際理解を価値の中心にした道徳学習の過程に、家庭・地域との連携や小中の連携を組み入れ、子どもの問いが連続していくように「内容項目間の関連を重視した総合単元的な道徳学習プログラム」として構想した。この道徳学習で深めた価値が学級づくりに生かされるような指導の在り方を計画し、実践を通して明らかにした。



＜　特別活動　＞

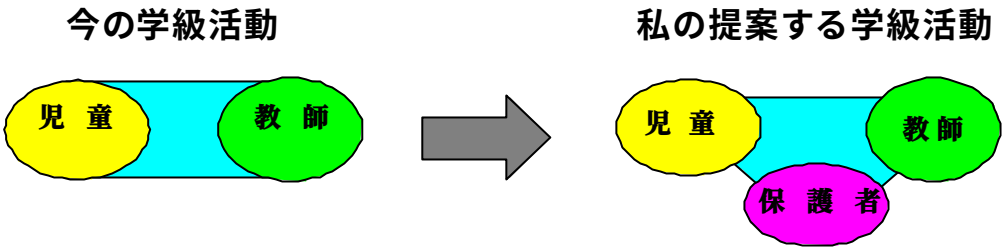
めざせ！！楽しい学級活動

互いのよさを生かし合い、みんなで喜び合う学級活動

－話合い活動に保護者との連携を取り入れたシミュレーションを通して－

本研究では、保護者と連携して、互いのよさを生かし合い、みんなで喜び合う、そんな楽しい学級活動を目指した。学級活動は、児童自らが考え実践することで学級や学校の生活を楽し

いものにしていく教育活動である。しかし「話合いが深まらない、満足できない。実践したがスッキリしない。」という課題がある。そこで学級活動を保護者とともに構想し、話合い活動をすることで児童の思いや願いを生かしていこうと考えた。



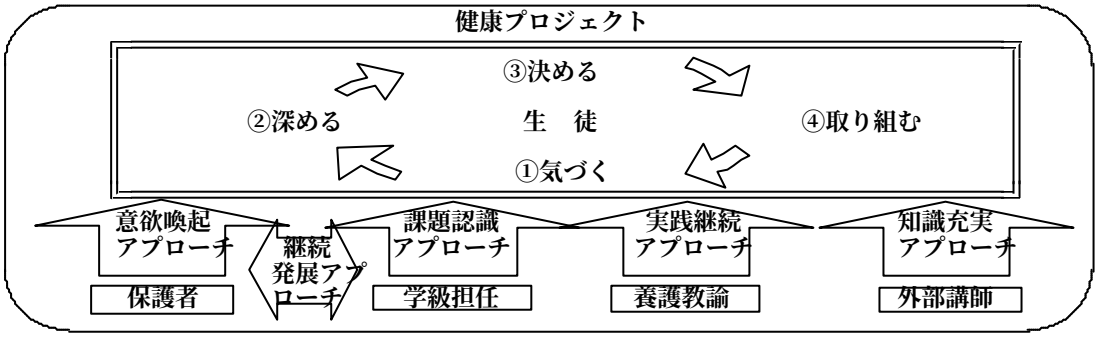
＜　健康教育　＞

自ら課題をもって健康づくりに取り組む保健指導の在り方

― 保護者と共に進める「健康プロジェクト」の実践 ―

日々の生活の在り方が、健康に関わりがあることを学び、健康は自分で作るものだということを意識して、実際に行動できる子どもを育てたいと考えた。健康教育は保護者との連携なくして考えられないことふまえ、保護者と共通理解を図りながら進めることが重要と考えた。

そこで、「気づく・深める・決める・取り組む」の学びの過程を、子どもの健やかな成長を願う人々が連携して支援する「健康プロジェクト」を計画し、内科校医の協力を得て実践に取り組んだ。

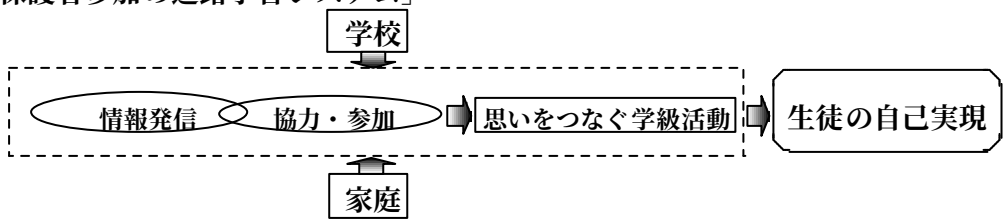


＜　進路指導　＞　　「家庭と共に進める進路指導の在り方」

－保護者参加の進路学習システムの構築を通して－

進路指導において大切なことは、一人一人の生徒の思いや願いを受け止め、自己実現へと導いていくことであるととらえる。本研究では家庭との連携がそのための有効な手だてであると考え、保護者参加の進路学習を構想していく。具体的には「情報発信」「協力・参加」」という二つのキーワードを設定し、学校と家庭の連携の道筋を明らかにしていく。さらに、キーワードに基づき、情報発信の手だてや学級活動のプログラムを作成した上で、保護者参加の進路学習システムを構築し、生徒の自己実現を図る連携の在り方を考えた。

「保護者参加の進路学習システム」



４　実践を終えて～ファイブ提案の宝物～

「知らせる」「やってみる」「振り返る」「つなぐ」の４つのキーワードをもとに連携の過程を明らかにする中で見つけたファイブ提案の宝物は次の３点である。

(1)　指導が変わる　「やり方次第でもっとできる」

連携の過程に基づき、教師や保護者の思いをもとに学びをつないでいくことにより、確かな連携がもたらされ、豊かな学びをつくることができた。

○　情報発信をし、取組を宣言していくことで学校の役割が改めて明らかになった。

○　家庭や地域の思いや願いを学びに生かすことにより、指導法の改善が図られた。

○　子どもの素晴らしさを知り、その変容を伝えていくこと、振り返ることにより、連携の価値を見出すことができた。

(2)　子どもが変わる　「考えを広げ、深めた」

学校が家庭・地域と連携の過程をつくることにより、子どもは保護者や地域の方などの多様な価値感や考えに触れ、自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。

○　見方・考え方が広がり、自分の言葉で話し合えるようになった。

○　意識していなかったことが意識できるようになり、よりよい行動をおこすようになった。

○　保護者の思いや願いを知り、家族の絆を深めた。

(3)　保護者が変わる　「親の願いや思いを伝えたい、生かしたい」

連携の過程をもとに学びをつなげていくことにより、保護者の学校への理解と協力が促された。

○　情報発信により学校の思いや願い、取組を知り、学校への理解を深め、関心を高めた。

○　相互理解により「思いや願いを生かしたい」という意識がもたらされ、協力が促された

○　子どもの変容に触れ、保護者として役割や学校と共にかかわることの大切さを見出した。